2019 年度東洋大学審査学位論文要旨

学位請求論文題目：　インド密教文献における仏教・ヒンドゥー教間の相克と調和―*Bhūtaḍāmaratantra* を中心として―

提出者：　東洋大学大学院文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程 3 年
4120150002　藤井明

本論文は、インド宗教において密教とヒンドゥー教がいかなる方法を以て互いを取り入れていったか、という問題に関して、タントラ内に見られる両宗教の実際の具体例を仏教版、ヒンドゥー教版の *Bhūtaḍāmaratantra* の比較検討を中心として提示することによって明らかにしていくことを目的としている。そこにおいては、異宗教の要素の取り込みの方法論が主題となる。

本論文において、密教とヒンドゥー教の関わりについて言及する国内外の先行研究を提示し、その研究史を検討したが、その研究史においても両宗教の関係性に関わる具体的事例が十分に示されてきたとは言い難い。本論文においては、これまで仏教学領域で議論されることの少なかった上記のような具体的事例を提示し、密教とヒンドゥー教がどのように関連してきたかを文献学的に考察した。なお本論文においては文献上に見ることのできる密教とヒンドゥー教の関わりの具体的事例を検討することを主眼においており、タントラ文献の出現という現象、あるいはその起源、ルーツにおける仏教とヒンドゥー教の文献史的前後関係を論じることは意図していない。本論文の構成は以下の通りである。

第 I 部　本編
第 1 章 本論文の目的と方法
1.1 Esoteric Buddhism と Tantra の区分
1.2 密教と諸宗教との関わりに関する先行研究
1.3 本論文の目的と方法
第 2 章 密教経軌にみられる仏教とヒンドゥー教の関係
2.1 大自在天の記述を中心とした仏教とヒンドゥー教との関わり
2.1.1 『陀羅尼集経』における大自在天
2.1.2 『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌経』における大自在天
2.2 大自在天の降伏譚
2.2.1 『三巻本底哩三昧耶』、『大日経疏』、『大日経義釈』『十八会指帰』中の大自在天の降伏譚
2.2.2 *Kāraṇḍavyūhasūtra*『大乗荘厳宝王経』中の大自在天の成仏
2.3 殺と降伏を伴った異宗教の取り込み
2.3.1 『初会金剛頂経』における「降伏」の語義

2.3.2 仏教諸文献に見られる「殺」の思想
2.3.3 初期密教経典に見られる殺を伴う修法
2.3.4 『初会金剛頂経』に見られる殺と降伏
2.4 小結
第 3 章 *Bhūtaḍāmaratantra* における仏教、ヒンドゥー教間の関係
3.1 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究とインド宗教史における文献的位置付け
3.1.1 仏教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究と文献的位置付け
3.1.1.1 BBT の先行研究と文献分類
3.1.1.2 BBT を引用する諸文献
3.1.2 ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究と文献的位置付け
3.1.2.1 HBT の先行研究とテキスト刊本
3.1.2.2 Ḍāmara 文献と HBT の関係性
3.1.2.3 BT の文献名を取り上げる例
3.2 仏教版、ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の内容比較
3.2.1 *Bhūtaḍāmaratantra* のテキストと構成
3.2.2 両版の発話者の異同から見る両 BT の成立過程
3.2.2.1 発話者の異同
3.2.2.2 bodhisatva が示す対象
3.2.2.3 Ba 写本中の Śūnya の瞑想の記述
3.2.3 8 ヤクシニーの修法
3.2.3.1 BT の Yakṣiṇīsādhana と他文献の Yakṣiṇīsādhana
3.2.3.2 BBT, HBT, UḌT 内の Yakṣinīsādhana の記述
3.2.4 マントラの暗号化
3.2.4.1 *Hevajratantra* におけるマントラの暗号化
3.2.4.2 単語と種字の対応（母音の指定）
3.2.4.3 各文字の指定方法（子音の指定）
3.2.4.4 ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* におけるマントラの暗号化の法則
3.2.4.5 母音対応列挙
3.2.4.6 子音対応列挙
3.2.4.7 種字を暗号化した上でのその対応の列挙
3.2.4.8 HBT 本文中で暗号化されたマントラ
3.2.5 ekaliṅga の記述を通したシヴァ派との関連
3.2.5.1 *Bhūtaḍāmaratantra* における ekaliṅga
3.2.5.2 他密教経軌内に見られる大自在天の住処
3.2.5.3 ekaliṅga の定義
3.2.6 *Bhūtaḍāmaratantra* 中の行者像
3.2.6.1 BT における肉を売る修法
3.2.6.2 密教文献に見られる肉、酒を売る修法

3.2.6.3 インド文学における肉を売る修法
結論 異宗教間の混交のシステムの一端
謝辞
第 II 部　テキスト編 *Bhūtaḍāmaratantra*, BBT 10 章, HBT 11 章 梵蔵漢対照テキスト、和訳
凡例
BBT 10 章、HBT 11 章サンスクリット対照テキスト
BBT 漢訳、BBT チベット語訳対照テキスト
BBT 10 章、HBT 11 章サンスクリット和訳
略号一覧 Abbreviations
参考文献一覧 References

本論文で主として扱った *Bhūtaḍāmaramahātantrarāja* あるいは *Bhūtaḍāmaratantra*（以下 BT）は、共通する文献タイトルと近似する内容を備えるヒンドゥー教版（Hindu Bhūtaḍāmata Tantra=以下 HBT）と仏教版（Buddhist Bhūtaḍāmara Tantra=以下 BBT）の両版が存在することから、仏教とヒンドゥー教間の関わりを考察する上で注目すべきタントラであり、この両版の内容を比較考察することで仏教とヒンドゥー教間の文献的交渉の具体例を提示した。

他の宗教を自らの宗教に取り入れる方法としては、概念、尊格、文章そのものの流用といった、いくつかの方法がこれまでの膨大な先行研究の中で示されている。本論文第 1 章では、19 世紀から近年までの密教と他宗教との関連について言及する国内外の先行研究をまとめ、その研究史を提示した。これによって、研究史における密教と異宗教の関わりという現象がアカデミックな世界でどのように捉えられてきたかを把握することになる。このような研究史は、これまでまとめられることの少なかった項目である。

その中における尊格の取り込みに関する比較的古い段階の文献に対する主題が、『初会金剛頂経』中の大自在天の降伏譚であろう。本論文第 2 章では、この降伏譚を中心とした異宗教の尊格の取り込みの方法論とその解釈を見た。

その前段階として、2.1「大自在天の記述を中心とした仏教とヒンドゥー教との関わり」では、これまで俎上にあげられることの少なかった密教経軌中の大自在天（摩醯首羅）に関わる記述を挙げ、仏教内での大自在天の扱いを見た。2.2「大自在天の降伏譚」では、先の大自在天の「降伏」と、シヴァ神を「如来へと昇華する」記述を挙げ、この記述に関連するパラレルな記述を他文献から提示し、異宗教の尊格の取り込みという方法論の展開を明らかにした。2.3「殺と降伏を伴った異宗教の取り込み」では、2.2 で挙げられた「殺害」という思想が仏教内でいかに扱われ解釈されているかを明らかにした。これは、「調伏」や「降伏」という異宗教の取り込みの方法において無視できない論点である。

第 3 章以降では、*Bhūtaḍāmaratantra* の仏教版(BBT)、ヒンドゥー教版(HBT)双方の記述を中心として、具体的な宗教間の要素貸借の理論と方法を検討した。上記の両 BT に

対しては、先行研究として Battacharyya[1933][1]が挙げられる。B. Battacharyya は仏教タントラ文献がシヴァ教に先立つものであることを論証することに努めた一人であり、B. Battacharyya が仏教、ヒンドゥー教双方の *Bhūtaḍāmaratantra* を扱い、仏教を早い年代に位置付けようとしたのも、この理論を補強するための題材として考えていた可能性は否定できない。本論文でも BT の成立過程を検討するために文献の先後関係も考察対象としているが、前述の如くその前後関係を明らかにすることが目的ではなく、具体的な異宗教間の要素の取り込みの構造を提示することを目的とした。

3.1「*Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究とインド宗教史における文献的位置付け」では、BBT と HBT に関する先行研究による言及と、BBT、HBT を引用する一次文献あるいは BBT、HBT に触れる記述を提示し、両 BT のインド宗教史における文献的位置づけを確認した。BBT に関しては 8 世紀後半から 9 世紀頃にかけて Bhūtaḍāmara の名称を備えた文献が存在した可能性が指摘されており、10 世紀には現行の BBT が存在していたことが指摘される。また、密教における Kriyā あるいは Caryā タントラとして見なされ、bhūtinī や yakṣiṇī の修法の典拠として利用されていたことを指摘した。HBT に関しては文献成立年代が明確ではない。しかしながら、11 世紀には成立していたと考えられるシュリーヴィドゥヤー派の *Nityāṣoḍaśikārṇava* (NṢA)内に挙げられる 64 タントラ内に *Bhūtoḍḍāmara* という記述が存在し、これを *Bhūtaḍāmara* とする注釈があることを明らかにした。NṢA 中で言及される Bhūtoḍḍāmara や Bhūtaḍāmara が現在問題にしている所の HBT であったならば、仏教版の成立後 11 世紀までには HBT が作られていた可能性があることを指摘した。

3.2「仏教版、ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の内容比較」以降では、BBT と HBT の比較考察を行った。3.2.1「*Bhūtaḍāmaratantra* のテキストと構成」では、今回の論文で用いた写本、刊本の構成の対照表を提示し、各写本のロケーションを示した。

3.2.2「両版の発話者の異同から見る両 BT の成立過程」では、B. Bhattacharyya によって一言されるものの、詳述されることのなかった HBT 中の仏教的要素の記述箇所を提示した。また、BBT と HBT の記述の相違とその変化について、「発話者」という点から考察した。比較考察の結果、BBT で用いられる bodhisattva という語が、HBT では mahādeva に付加される（写本 N1）、もしくは krodhabhairava に付加される（写本 N2, N3, Bo, Ba, 刊本）、あるいはその話者に混乱が見られた。これは、元来仏教タントラで述べられていた mañjuśrīkumārabhūta という尊格名をヒンドゥー教版が bhairava に置き換えたものの、bodhisatva という語を残してしまったために生じたものであることを指摘した。ここから、Bhattacharyya が主張するところの「仏教版が先行する」という説は、「発話者の相違」に由来すると考えられるヒンドゥー版における「文章の混乱」という点か

[1] Bhattacharyya, B. 1933. "THE CULT OF BHŪTAḌĂMARA." *Proceedings and Transactions of The Sixth All-India Oriental Conference*. The Bihar and Orissa Research Society, 349-370.

ら見ても妥当だと言い得る。また、Bhattacharyya による先行研究は HBT の Ba 写本のみを利用した論述であったため、Bhattacharyya によって言及される箇所を HBT の他写本との比較から論及した。

3.2.3「8 ヤクシニーの修法」では、8 ヤクシニーの修法の記述を通して、BT の後代への影響と変遷過程について論究した。考察方法としては、Īśvara と Pārvatī の対話形式のタントラであり、ヒンドゥータントラである *Uḍḍāmara* あるいは *Uḍḍāmareśvara tantra*（別名 *Mantracintāmaṇi*）(UḌT)の中に引用される Yakṣiṇīsādhana と、BBT、HBT 内の Yakṣiṇīsādhana の記述の比較を行った。この比較考察の結果、BBT がヒンドゥー教に受け入れられた過程には 2 つの流れがあることを指摘した。1 つの流れとしては Yakṣiṇīsādhana を引用した UḌT に連なる流れである。UḌT 中に説かれる Yakṣiṇīsādhana は HBT からの直接の引用ではなく、BBT 由来の Yakṣiṇīsādhana を利用したものである可能性を示した。そしてもう 1 つの流れとしては、登場する尊格名の変更やマントラの暗号化といった操作を行った HBT を利用する流れを指摘した。

3.2.4「マントラの暗号化」では、BBT 内で明確に示されるマントラが HBT 内で暗号化されて説かれることに関して、*Hevajratantra* (HT)の暗号化の法則と合わせ、HBT のマントラの暗号化とその方法の理論について明らかにした。HBT のマントラの暗号化の法則は、HT と同様尊格名と音を対応させて、それを用いて種字やマントラを描くというものであった。しかしながら、HBT 中では HT の子音の指定方法である prathamasya prathama の様な方法は用いられていない。また、HBT は BBT 由来のタントラと考えられるが、その音と単語との対応は HT の単語の対応とは別の伝統に属し、同様に Vaiṣṇava 内の対応とも異なる伝統によるものであったことを指摘した。また、BBT と HBT 内のマントラの対応を通して、ヒンドゥー教版が仏教版のマントラをも踏襲していることを明らかにした。

3.2.5「ekaliṅga の記述を通したシヴァ派との関連」では、BBT の中に見ることのできる「大自在天祠」や「大自在天廟」といった語に焦点を当て、仏教、ヒンドゥー教双方の他文献内の記述と対照させ、仏教内に流入する異宗教的要素について考察した。

3.2.6「*Bhūtaḍāmaratantra* 中の行者像」では、仏教文献とヒンドゥー文献、あるいはインド文学内でパラレルな記述を認めることのできる「肉を売る修法」を中心として、この修法内容の影響関係について考察した。

結論においては、以上の考察と具体的事例を踏まえ、密教とヒンドゥー教間の要素の取り込みの構造を分析し、異宗教間の混交のシステムのモデルの一部を提示した。以上が本論文の第 I 部の本編の概要である。

第 II 部では、特に 3.2.3 で扱った BBT、HBT の Yakṣiṇīsādhana の章のサンスクリット校訂テキスト、和訳、BBT の漢訳とチベット語訳の対照テキストを提示した。BBT のサンスクリット校訂に際しては写本 4 本（G 写本　Bandurski[1994] Xc 14/50, 貝葉, 12 世

紀. A 写本　A Catalog of Nepalese Manuscripts in the Asha Archives, dp.No.3695 / cd.No.ASK_BL_07, 紙本, Nepal saṃvat 1052(=A.D. 1932). T1 写本　Matsunami No.274, 貝葉, Nepal samvat 671(=A.D. 1551). T2 写本　Matsunami No.273, 紙本, 書写年不詳）を利用し、HBT のサンスクリット校訂には写本 5 本（N1 写本　NGMCP Catalogue Reel No. B134-12, Inventory No. 11976, 紙本, 書写年不詳. N2 写本　NGMCP Catalogue Reel No. B135-45, Inventory No. 11975, 紙本, 書写年不詳. N3 写本　NGMCP Catalogue Reel No. A167-6, Inventory No. 11974, 紙本, Nepal saṃvat 802(=A.D. 1682). Bo 写本　Descriptive Catalogue of the Government Collections of Manuscripts. deposited at the Bhandarkar Oriental Research Institute No.295, 紙本, samvat 1909 (=A.D. 1852). Ba 写本　An Alphabetical List of Manuscripts in the Oriental Institue Baroda. Serial No.528 / Accession No.9168, 紙本, 書写年不詳）を利用した。

BBT に関しては、これまでサンスクリットテキストが未発表であったため、本論文が初のテキストの提示となる。また、HBT に関しては、従来いくつかの刊本が出版されていたが、何れも依拠した写本の情報が明確ではなく、写本に戻ることができないものであったため、本稿では新たに各写本のロケーションも共に提示した。

以上の考察とテキストの提出によって、本論文の主題である密教とヒンドゥー教の関わりに関して、「ヒンドゥー教から密教」への要素の流入と、その逆方向の「密教からヒンドゥー教」への要素の流入の具体的事例を提示した。

以上の両 BT の比較や、降伏と再生による尊格の変容という点からは、少なくとも、「共有し得る要素」と「共有し得ない要素」の二つの範囲が設定できる。

ここでの「共有し得る要素」内に含められるのは、3.2.3 で扱った Yakṣiṇī の修法や、その他の BT 内に説かれる Bhūtinī などの半神の修法、3.2.6 で扱ったインド文学中でも扱われている肉を売る修法などである。「共有し得ない要素」の範囲に関わるものは、3.2.2 で見たような Mañjuśrī や Krodhabhairava といった尊格名が修正と変更を加えられていた例や、『初会金剛頂経』「降三世品」における Mahādeva の再生と成仏という文脈の中での尊格の改変である。この再生と成仏に対する教学的解釈に関しては 2.3.4 で見た。

文献の編纂者にとって「共有し得ない要素」は改変、修正され、あるいは「降伏」と「再生」あるいは「授記」のようなイニシエイションの記述を以て自派の中に取り込まれる。少なくとも本論文で扱った内容に関しては、それは仏教であれヒンドゥー教であれ似通った操作を行っている。また、大枠では「共有し得る要素」に対しては若干の改変を伴って受容されていた。

本論文のタイトルである「相克」は、上述の「共有し得ない要素」の範囲を示し、「調和」は「共有し得る要素」の範囲と、改変の後に受容された要素を示すものである。本論文においては、このような異なる文化、信仰形態が対峙した際に、各々の宗教がどのような形態で異宗教に対応するかという問題に関して、一つのモデルを示した。